

[B年] 降誕前第8主日(2021年10月31日)**【旧約聖書日課】創世記4章1～10節**

1さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。2彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。3時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。4アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、5カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。6主はカインに言われた。

「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。7もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」

8カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。

9主はカインに言われた。

「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」

カインは答えた。

「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」

10主は言われた。

「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。」

【使徒書日課】ヨハネの手紙一3章9～18節

9神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にいつもあるからです。この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。10神の子たちと悪魔の子たちの区別は明らかです。正しい生活をしない者は皆、神に属していません。自分の兄弟を愛さない者も同様です。

11なぜなら、互いに愛し合うこと、これがあなたがたの初めから聞いている教えだからです。

12カインのようにってはなりません。彼は悪

い者に属して、兄弟を殺しました。なぜ殺したのか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。13だから兄弟たち、世があなたがたを憎んでも、驚くことはありません。14わたしたちは、自分が死から命へと移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛することのない者は、死にとどまったままです。15兄弟を憎む者は皆、人殺しです。あなたがたの知っているとおりに、すべて人殺しには永遠の命がとどまっています。16イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。17世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう。18子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう。

【福音書日課】マルコによる福音書7章14～23節

14それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。15外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」†〈16聞く耳のある者は聞きなさい。〉17イエスが群衆と別れて家に入られると、弟子たちはこのたどえについて尋ねた。18イエスは言われた。「あなたがたも、そんなに物分かりが悪いのか。すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができないことが分らないのか。19それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される。こうして、すべての食べ物清められる。」20更に、次のように言われた。「人から出て来るものこそ、人を汚す。21中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、22姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、23これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

創世記4章1～10節

1さて、人は妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「私は主によって男の子を得た」と言った。2彼女はさらに弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。3日がたって、カインは土の実りを供え物として主のもとに持って来た。4アベルもまた、羊の初子、その中でも肥えた羊を持って来た。主はアベルとその供え物に目を留められたが、5カインとその供え物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。6主はカインに向かって言われた。「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。7もしあなたが正しいことをしているのなら、顔を上げられるはずではないか。正しいことをしていないのなら、罪が戸口で待ち伏せている。罪はあなたを求めるが、あなたはそれを治めなければならない。」

8カインが弟アベルに声をかけ、二人が野にいたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。9主はカインに言われた。「あなたの弟アベルは、どこにいるのか。」彼は言った。「知りません。私は弟の番人でしょうか。」10主は言われた。「何ということをしたのか。あなたの弟の血が土の中から私に向かって叫んでいる。」

ヨハネの手紙一 3章9～18節

9神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にとどまっているからです。この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。10これによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行わない者は皆、神から出た者ではありません。きょうだいを愛さない者も同様です。

11なぜなら、互いに愛し合うこと、これがあなたがたが初めから聞いている教えだからです。12カインのようになってはなりません。彼は悪者から出て、兄弟を殺しました。なぜ殺した

のか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。13きょうだいたち、世があなたを憎んでも、驚いてはなりません。14私たちは、自分が死から命へと移ったことを知っています。きょうだいを愛しているからです。愛することのない者は、死の内にとどまっています。15きょうだいを憎む者は皆、人殺しです。人殺しは皆、その内に永遠の命をとどめていないことを、あなたがたは知っています。16御子は私たちのために命を捨ててくださいました。それによって、私たちは愛を知りました。だから、私たちもきょうだいのために命を捨てるべきです。17世の富を持ちながら、きょうだい貧しく困っているのを見て憐れみの心を閉ざす者があれば、どうして神の愛がその人の内にとどまるでしょう。18子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いと真実をもって愛そうではありませんか。

マルコによる福音書7章14～23節

14それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「皆、私の言うことを聞いて悟りなさい。15外から人に入って、人を汚すことができるものは何もなく、人から出て来るものが、人を汚すのである。」[†] <16聞く耳のある者は聞きなさい。> 17イエスが群衆と別れて家に入られると、弟子たちはこのたとえについて尋ねた。18イエスは言われた。「あなたがたも、そんなに物分かりが悪いのか。すべて外から人に入って来るものは、人を汚すことができないことが分からないのか。19それは人の心に入るのではなく、腹に入り、そして外に出されるのだ。」このようにイエスは、すべての食べ物を通い清いものとし、20さらに言われた。「人から出て来るもの、これが人を汚す。21中から、つまり人の心から、悪い思いが出て来る。淫行、盗み、殺人、22姦淫、貪欲、悪意、欺き、放縦、妬み、冒瀆、高慢、愚かさ、23これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・10月31日「降誕前第8主日」の日課主題は「墮落」。旧約聖書日課は、「創世記」から、「カインとアベル」の物語の箇所。使徒書日課は、「ヨハネの手紙一」から、互いに愛し合うことの実践についての勧めの箇所。福音書日課は、「マルコ福音書」から、主イエスがファリサイ派と昔の人の言い伝えに関する議論を交わした後に告げられた教えの箇所。

・この日は、「宗教改革記念日」。1517年10月31日に、ドイツの修道司祭で大学教授であったM.ルターがヴィッテンベルク城教会の扉に「95箇条の提題」を貼り出し、神学論争を開始したところから教会改革・分離が起こったことを記念してきたが、500年を迎えるにあたって、ローマカトリック教会とルター派教会は共同で声明を重ね、教会一致を目指す合同の記念礼拝を執り行ってきた。「宗教改革記念」の今日的意義は、完全に、教会一致に向けたものとなっている。

旧約日課(創世記4章より)

・「創世記」については、先主日の資料参照。
 ・日課箇所は、「原初史」(1~11章)の前半部の終わりに置かれた「カインとアベル」の物語。最初の人(アダム)とその妻(エバ)の間に誕生した二人の男子にまつわる物語。「アダムとエバ」の物語で描かれた「墮罪と追放」が世代を超えて繰り返されるが、そこになお神の御手の守りが維持されていることも告げられる。
 ・この物語についての解釈は、「新約」の中でいくつか触れられており、1世紀当時にユダヤ人の中で流布していた解釈を押し量ることができる。すなわち、アベルは信仰に基づいて「良い献げ物」をしたが、カインは不信仰のゆえに「不十分な献げ物」をした故に神の目に留めていただけなかったことを逆恨みし、神の前から退けられた、といった解釈である。このような解釈に対しては、いくつかの視座から難点が指摘される。まず、カインの弟殺しの発端となった「献げ物」に対する神の取扱い方が問題として指摘されることがある。本文の描写から、カインとアベルの「献げ物」にその信仰の質を測れるほどの違いが明確にあったと言えるのか。違いがなかったとしたら、神が二人に対する対応を異にした理由はどこにあるのか。あるいは、違いがあったとしても、神は二人に対する対応を大きく変える必要があったと言えるのだろうか。そもそも、「献げ物」に対する神の取り扱いの違いがあったという描写は、神の行為の差異を意味しているのか、受け取り手である人の側の受け取り方の差異を意味しているのか。神は、カインのご自身に対する態度に問題が生じていることをご存じでありながら、彼が暴発して弟殺しに向かってしまうのを阻止しなかったのだから、神にもこの殺人の責任が問われるべきなのではないか。殺人の責任を問われて追放処分を受けたカインが、なお「しるし」を付けられて神の守りの内に置かれ

たというのは、神ご自身が一連の問題に対する責任を完全に回避できなかったからではないのか。黙想の行方は、これらの矛盾を解消しうる神学的一貫性のある解釈に至れるかどうかにかき左右される。

・カインとアベルそれぞれの職業設定については、イスラエルの伝承正史において、かつて「遊牧民」として生きて来た者たちが、カナン定住後に「農耕民」に移行したとされていることが反映されていると言われる。しかし、そのような視点から、この物語が「農耕生活」時代よりも「遊牧生活」時代に高い価値を見ている、と解することができるかは疑問が残る。

使徒書日課(1ヨハネ3章より)

・「ヨハネの手紙一」は、「ヨハネ福音書」「手紙二」「手紙三」と共に「ヨハネ文書」として扱われ、同じ「ヨハネの教会共同体」で著された一連の文書と考えられている。ヨハネ文書研究者の間では、「手紙一」は原「ヨハネ福音書」が有していた(と考えられる)主張の偏りに修正を与えるために著され、それに基づいて現行知られている修正「ヨハネ福音書」が整えられた、という著作過程が推認されている。現行の「ヨハネ福音書」については、一旦編集の完了した文書に付加した部分(21章など)があることは、誰の目にも明らかである。研究者らは、「ヨハネの教会共同体」において起こっていた神学論争に対する一方の立場の擁護文書として原「ヨハネ福音書」が作成されたが、それによって増幅した相互の裁き合いや、愛の実践の軽視に危機を感じた者が、主イエスの教えの柱である「互いに愛し合うこと」に徹底的に焦点を合わせた和解勧告文書として「手紙一」を発表したと考えている。確かに、「手紙一」は、5章を通して、繰り返す「互いに愛し合うこと」の根拠づけが述べられている。

・「人の愛(互いに愛し合うこと)」と「神の愛(神への愛)」とを並置して教えることは、「共観福音書」の伝える主イエスが「最も重要な掟」として教えられたところにも見られる。その両者の関連性を強く示すのが、日課箇所を含む「手紙一」である。日課箇所では、「神の愛」とどまっている人は自ずと「互いに愛し合うこと」に向かうのであって、「互いに愛し合うこと」が実践できていない者は「神の愛」とどまっていない者なのだとして主張している。ところが、実際には、さらに踏み込んで、誠実に「互いに愛し合うこと」の実践に生きるならば、その人の内に「神の愛」がとどまることになるだろうということまで触れている。この主張は、一歩間違えば「神の愛」を呼び込むために人が「互いに愛し合うこと」の実践に励むという、一種の「行為義認/自己義認」に陥る恐れがある。その危険を冒してもこのような主張に踏み込むのは、「手紙一」の著者が彼の「ヨハネの教会共同体」の現状において、「キリストを介して神と一致」していることを至上として共同体メンバーとの関係さえ疎かにする者たちがあることを強く危惧してのことだったのかもしれない。

福音書日課(マルコ 7 章より)

・日課箇所は、主イエスがファリサイ派らと論争された逸話の一つで、「昔の人の言い伝え」に関する論争として知られている箇所の最後に置かれた教え。主イエスの弟子たちがユダヤ人の習慣どおりに日常的な「清め」を実践していないことをファリサイ派らが指摘し問題視する、という場面設定から始まり、主イエスがファリサイ派の規範遵守の態度が実のところ恣意的な二重基準になっていることを批判、それを踏まえて、群衆に向けて「汚れ」の問題の本質をお教えになられているのが日課箇所である。ここで指摘されている事柄は、ある種の「原罪論」と見ることもできる。

・この逸話は、前段と結びついた形で伝えられているが、元来は独立した語録であったのかもしれない。しかし、独特の強烈な言葉が用いられており、聞いた者に強い印象を残したと推認される。すなわち、「人の体に入るもの」と「人の中から出て来るもの」とは、明白に、「食べ物を食べること」と「排便すること」として語られており(18~19 節)、譬えだとしても決して上品な表現とは言えない。弟子たちが当初、この教えに戸惑って尋ね直したとされているのも、このような強烈な譬えで語られていたことを解せなかったからであろう。にもかかわらず、これが「福音書」に収められる逸話として伝承されたのは、前段でのファリサイ派らとの論争を踏まえて、二重にふさわしいものとみなされたからだろう。すなわち、まず第一に、「食事」に際して「清め」の手洗いをするかどうかという問題に対する応答として、第二に、「神の言葉」を自己流に操って二重基準を用いながらも自己正当化する者たちの本音に何が巢食っているのかという指摘として、日課箇所の逸話は適切な答えとなっているのである。

来週の誕生日 (10 月 31 日~11 月 6 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-224 番「われらの神、くすしき主よ」(= I-73 番「くすしきかみ、たえなる主よ」)は、17 世紀ドイツ改革派牧師で敬虔派の影響を受けて讃美歌創作をした J.ネアンダーの作詞。曲は、この歌詞を自身の歌集で発表する際にネアンダー自身が指定して掲載した曲(作曲者不詳。ネアンダーの自作?)。
- ・21-419 番「さあ、共に生きよう」は、ドイツで毎年行われている全国信徒大会 1983 年大会のために編纂された讃美歌集『いのちに立ち返ろう』から採用された讃美歌。
- ・21-377 番「神はわが砦」(I-267 番「神はわがやぐら」)は、宗教改革者 M・ルターの作詞作曲。歌詞は詩編 46 編によるもので、嘆きに対する慰めの歌。プロテスタント宗教改革の“主題歌”のように受けとめられ、プロテスタント諸教派の讃美歌集に必ず所収されてきたが、近年は、カトリック教会(英語圏)の聖歌集にも入れられている。

21-224「われらの神、くすしき主よ」

Wunderbarer König

1. Wunderbarer König, Herrscher von uns allen, / laß dir unser Lob gefallen; / Deines Vaters Güte hast du lassen triefen, / ob wir schon von dir wegiefen: / Hilf uns noch, / stärk uns doch; / laß die Zungen singen / laß die Stimmen klingen.
2. Himmel, lobe prächtig deines Schöpfers Thaten, / mehr als aller Menschen Staaten. / Großes Licht der Sonne, schieße deine Strahlen, / die das große Rund bemalen; / lobet gern, / Mond und Stern, / seid bereit zu ehren / einen solchen Herren!
3. O du meine Seele, singe fröhlich, singe! / singe deine Glaubenslieder; / was den odem holet, jauchze, preise, klinge; / wirf dich in den Staub darnieder! / Er ist Gott / Zebaoth! / Er nur ist zu loben, / Hier und ewig droben.
4. Hallelujah bringe, wer den Herren kennet, / wer den Herren Jesum liebet; / Hallelujah singe, welcher Christum nennet, / sich von Herzen ihm ergiebet. / O wohl dir! / glaube mir: / endlich wirst du droben / ohne Sünd ihn loben!

21-419「さあ、共に生きよう」

Damit aus Fremden Freunde werden

1. Damit aus Fremden Freunde werden, / kommst du als Mensch in unsre Zeit: / Du gehst den Weg durch Leid und Armut, / damit die Botschaft uns erreicht.
2. Damit aus Fremden Freunde werden, / gehst du als Bruder durch das Land, / begegnest uns in allen Rassen / und machst die Menschlichkeit bekannt.
3. Damit aus Fremden Freunde werden, / lebst du die Liebe bis zum Tod. / Du zeigst den neuen Weg des Friedens, / das sei uns Auftrag und Gebot.
4. Damit aus Fremden Freunde werden, / schenkst du uns Lebensglück und Brot: / Du willst damit den Menschen helfen, / retten aus aller Hungersnot.
5. Damit aus Fremden Freunde werden, / vertraust du uns die Schöpfung an; / Du formst den Menschen dir zum Bilde, / mit dir er sie bewahren kann.
6. Damit aus Fremden Freunde werden, / gibst du uns deinen Heiligen Geist, / der, trotz der vielen Völker Grenzen, / den Weg zur Einigkeit uns weist.

I-267「神はわがやぐら」=21-377

Ein feste Burg ist unser Gott

1. Ein' feste burg ist unser Gott, / Ein' gute whr' und waffen; / Er hilft uns frei aus aller noth, / Die uns jetzt hat betroffen. / Der alt' böse feind, / Mit ernst er's jetzt meint, / Groß' macht und viel list / Sein' grausam' rüstung ist, / Auf erd' ist nicht sein's gleichen.
2. Mit unser macht ist nichts gethan, / Wir sind gar bald verloren: / Es streit' für uns der rechte mann, / Den Gott hat selbst erkoren. / Fragst du, wer der ist? / Er heiß Jesus Christ, / Der Herr Zebaoth, / Und ist kein ander Gott, / Das feld muß er behalten.
3. Und wenn die welt voll teufel wär' / Und wollt' uns gar verschlingen, / So fürchten wir uns nicht so sehr, / Es soll uns doch gelingen. / Der fürst dieser welt, / Wie sau' er sich stellt, / Thut er uns doch nicht, / Das macht, er ist gericht't, / Ein wörtlein kann ihn fällen.
4. Das wort sie sollen lassen stan, / Und kein dank dazu haben, / Er ist bei uns wohl auf dem plan / Mit seinem geist und gaben. / Nehmen sie den leib, / Gut, ehr', kind und weib, / Laß fahren dahin, / Sie haben's kein gewinn, / Das reich muß uns doch bleiben.